

年に一度の中国語で中国語圏の文化を学ぶ「中国語による国際理解講座」を今年も1月27日に開催しました。「日本と中国の鬼文化の違い」というテーマで講演してくれた李童一心さんに、故郷について、そして民俗学と音楽の世界に進んだきっかけを伺いました。後半は講演の概略も紹介します。



中華人民共和国
面積 9,600,000km²
人口 約14億人
首都 北京
公用語 中国語

故郷はどちらですか？

四川省の眉山です。省都成都からバスで1時間ほどかかる小さな町ですが、自然がとても美しいところです。私のお勧めは湿地公園で、毎週末、花火があがります。眉山には国や県が指定した伝統的村落がたくさんあり、竹編みの伝統技術など多くの「無形文化遺産」も継承されています。また、「赤壁の賦」で有名な詩人蘇東坡(注)の出生地でもあり、生家「三蘇祠」を訪ねることもできます。彼が作り出したと言われる「東坡魚」「東坡肉」は眉山の名物料理です。

(注)北宋の文人、政治家。字は子瞻、号は東坡居士。詩の名作を残し、日本の(五山文学)にも大きな影響を与えた。父蘇洵、弟蘇轍と合わせて三蘇とよばれる。

日本に留学したきっかけは？

小学四年生の時に北京に引っ越して、そこで日本のアニメやゲーム、その音楽にはまりました。日本のサブカルチャー好きが高じて、中国の大学では日本語を専攻し、日本の近代文学、特に芥川龍之介や泉鏡花など日本の伝統的な美意識が込められた文学が好きになり、その作品世界に傾倒しました。それで、大阪の大学院で民俗学として妖怪文化を研究することにしたのです。

今、川崎の音楽大学で学ばれている理由は？

中学時代からサブカルチャーの音楽に関わり、大学では

バンドを組み、キーボードでカバー曲の演奏もしていました。大学院を修了した後、一度は就職したのですが思っていた仕事と違って、だんだん中学時代から続けてきた音楽の夢を実現したい気持ちが強くなりました。それで、日本の作曲家事務所に所属しながら、音楽大学で学ぶことを決意しました。サブカルチャーを通して、受け身ではなく、自分の想いやメッセージを曲として創っていく人間になりたいと思っています。

今後どのような音楽を作っていきたいですか？

現在、大学院で研究した日本の妖怪文化に関する音楽プロジェクトを立ち上げようとしています。また、人に見せたくない若者の心の奥の想いを表現して、共感を得られるような作品を世界に発信したいと思っています。

※曲は以下から視聴できます。
Bilibili: ①<https://space.bilibili.com/1639486601>
②<https://space.bilibili.com/696794>
ニコニコ:<https://www.nicovideo.jp/user/128715177>
YouTube:https://www.youtube.com/@Salviarkk_music
X(旧Twitter):https://twitter.com/salviarkk_music
<https://salviarkkmusic.wixsite.com/salviarkk-music>



【李童一心さんの中国語による国際理解講座「日本と中国の鬼文化の違い」概略】

○日本の伝統的な鬼のイメージ

古代、鬼が初めて登場した『出雲風土記』や中世の『今昔物語集』の地獄の鬼、中世の戦争や混乱による盗賊・強盗の鬼のイメージから、日本の鬼は、未知のもの→片目を持つ人食い→仏教や道教における地獄の鬼→強盗・盗賊→現代の角と牙を持ち、虎皮の服を着て、こん棒を持っているステレオタイプ化へと変遷してきた。

○中国の伝統的な鬼のイメージ

古代：人型の生物を表現?→夏王朝時代：善悪の概念の形成により鬼も分化(良いことをする鬼は神、災いをもたらす鬼は悪霊)→殷時代：鬼と祖霊の概念と神の概念が結びつく→春秋時代から戦国時代：鬼は恩を仇で返す、または復讐譚として文学に登場→後漢末から三国時代：仏教や道教の影響を受け、鬼の種類が豊富に、姿も奇妙に。(例：牛頭、

馬面、黒無敵、白無敵、夜叉、羅刹など)→唐・宋時代：社会が安定し、文学の中にも善良な鬼が急増。人間と鬼が恋に落ちる話も。鬼のイメージが次第に人間の姿に固定化→明清時代：君主独裁が強化され、文人は幽霊を使って人間世界の真実、善、美、偽、醜を表現。この頃の鬼のイメージは今の幽霊と同じ。

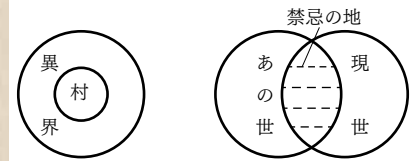
日本と同様、古代、正体不明な人間のような生き物は鬼であり、仏教の影響以降、地獄を意味する鬼に中国語の幽霊が加わった。仏教の影響を受けて、中国語の鬼に、日本文化における地獄の怪物のイメージが加わった。地獄にいる鬼のイメージは、ほぼ日本と同じである。

日本も中国も鬼が、人間の生活空間の外のあの世に存在したり、人間のいる現世に侵入してくるものである点では共通しているが、中国の鬼は、人の死後にあの世に存在し、人間のいる現世に侵入してくる亡霊である。これは日本の幽霊に似ている。

○現代における「日本と中国の鬼文化の違い」

- (1)日本の鬼は人を食べるので「鬼一口」のような言葉があり、中国の鬼はいたづらをしたり、危害を加えたりするだけなので「鬼把戏(悪だくみ)」、「搗鬼(トラブルを招く)」のような言葉がある。
- (2)日本では幽霊を表す言葉はほとんど蔑称であるが、中国では鬼(日本でいう幽霊)に対して「小鬼(面白い、かわいい)」、「鬼才」などの肯定的な言葉もある。
- (3)日本の鬼は怖く、残酷で、力強く、ある種の権威を象徴しているので、厳しく怖い人物を「鬼將軍」や「鬼嫁」と呼び、「力」を強調する。一方、中国では、鬼は死者を想起させ、悪い意味合いが強い。例えば好きではない場所を「鬼地方」と呼び、悪い天気を「鬼天気」と呼ぶ。

実際、日本では、鬼は残忍な性格を持つ猛獣のような怪物だが、権威と力の象徴として好感を持たれ、「鬼滅の刃」のような鬼を題材にしたアニメが世界的な人気を博し、子ども向けの絵本にもかわいいう Mascottの姿をした鬼の絵がある。日本の鬼はもはや恐ろしい存在ではなく、むしろ社会的にポジティブな役割を担っている。一方、中国では、鬼は「死後」のイメージが強く、未だに誰もが鬼に対して否定的、恐怖心を抱いている。そのため、迷信が廃れて久しい現在でも、中国には祖先の霊に対する畏敬の念が残っており、鬼は死者の霊として理解され、鬼(幽霊)が出発しないように、さまざまな儀式が行われ、そこには良い人生を送るための祝福も込められている。日本では霊を祀り、中国では鬼を祀っていることを除けば、共通しているのは故人の魂である。



イメージが固定されている日本の鬼と違い、中国の鬼は固定されておらず、「人間から鬼に変わった」経緯によってイメージが変わる。例えば、人が餓死すれば餓鬼の鬼になるし、人が貪欲に死ねば貪欲な鬼になる。ある意味、日本における「地縛霊」や「幽霊」に近い。中国の作品では、「幽霊」は皮肉な意味さえ与えられ、芸術表現の一部となる。